

第20回 日本エイズ学会速報

通算第 1 号

発行：2006年11月30日（金曜）午後5時

編集：第20回日本エイズ学会学術集会 広報部

Living Together
ネットワークを広げ真の連携を創ろう

第20回エイズ学会 開幕 陽性者の参加で リビングトゥゲザー実感 定例プレスブリーフィング・第1日



記者をまえにブリーフィングする池上会長

定例ブリーフィングの初日は、正午から池上千寿子・学会会長、陽性当事者としてプログラム委員である長谷川博史・日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス代表、運営委員である川名奈央子さん（ジャンププラス）が出席した。司会は根岸昌功・駒込病院医師が行なった。

●すでにともに生きていることを実感する気づきの機会

冒頭、池上会長はつぎのように述べた。

「今回の学術集会（以下、学会）は、運営委員として男女それぞれ1名ずつの陽性当事者に参加していただいた。そのお一人が川名さん。HIV/エイズには、医療者だけでは有効な対策をとれない。陽性者すなわちHIVとともに生きている人は、予防においてもケアの面においても、HIVとともに向き合うパートナーだ。

今回の学会では、陽性者のかたにいろいろなプログラムに参加してもらい、コミュニティとのリエゾン（橋渡し）の役割を果たしてもらっている。午後の記念シンポジウムにも登壇し、明日は陽性者の世界組織であるGNPプラスの初代代表で、いまは国連とも協力して活動しているドゥガニエさんが記念講演する。こうしたことは、これまで20回の学会ではじめてであり、今回のテーマである“リビングトゥゲザー”を実感できる、いろいろな気づきの機会を得ることができるだろう」

つづいて川名奈央子さんもつぎのように述べた。

「私は94年に感染がわかり、97年ごろから医療者の研修でスピーカーとして活動していた。その後活動を休んでいたが、昨年、神戸のアジア・太平洋地域エイズ国際会議で長谷川さんとお会いして、ジャンプの活動に参加するようになった。いまはアジア太平洋地域の陽性者ネットワークであるAPN+の共同代表を、フィリピンなど4か国の陽性者とともにつとめている。

こうした学会に参加するのは今回がはじめてで、学会は私たち

陽性者とは関係ないものだと思っていた。私は企業に勤め、子どももいる、研究者でもなんでもない女性。リビングトゥゲザーのテーマのもと、エイズ学会が陽性者とともに考え、創っていく場になれたらと思い参加した」

おなじく陽性当事者として長谷川博史さんも、「エイズはたんに医学だけの問題ではない、社会全体の問題であり、国際会議ではすべてのセクターから参加がある。日本のエイズ学会で、NGOやコミュニティベースの組織（CBO）、福祉や社会学の人が参加し新しい方向へ動き出したことは、ひじょうに意義のあることだ」と述べた。また、みずから編集した『コミュニティアクション06』のパンフレットを紹介した。

●陽性者はコミュニティと学会のギャップを埋める

つづいて質疑応答にうつった。

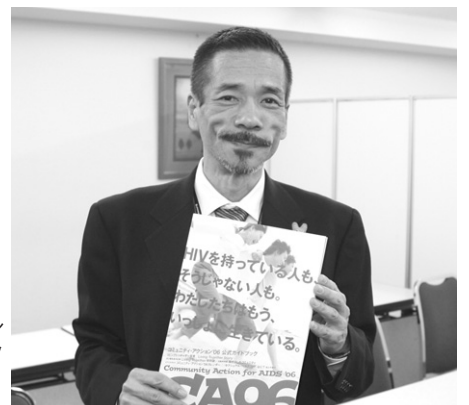
これまで陽性当事者の学会への関与について池上会長は、「シンポジウムのパネラーや演題発表者のなかにももちろん陽性の人はいただろう。血液製剤で感染したかたも積極的に活動した。しかし、複数のシンポジウムその他のプログラムにまたがって陽性者の存在がこのように強く意識されるのははじめてだ」と述べた。

陽性者が果たすリエゾンの役割については、「日本語で言うと、連携ということ。94年の横浜会議で日本の組織委員会と各国の陽性者団体をつなぎ、その人たちの意見が会議に反映されるように受け入れ窓口として活動した。学会の運営委員会はどうしても医療者中心になりがちで、陽性者のコミュニティとのあいだにギャップがある。それをつなぐのがリエゾンの役目だ。日本にはすでにいくつか陽性者の団体があるので、ご参加をお願いした」と補足の説明をした。

また、ドゥガニエ氏やブラジルからの参加がある一方、フィリピンからはビザの発給が遅れて参加できなかった陽性者もいたが、HIVに国境はないことが強調された。

陽性者の運営への参加について長谷川氏は、「シンポや分科会に陽性者の参加を考えるなかでテーマ自体も検討しなすなど、学会をより豊かなものにするうえで陽性者の参加は大きな役割を果たした」と述べた。

明日（12月1日）のプレスブリーフィングは正午から705号室で、池上会長と、基礎医学の分野から山本直樹・国立感染症研究所エイズ研究センター長が出席して行なわれる。



『コミュニティアクション06』のパンフレットを手にする長谷川・ジャンププラス代表